

自宅が
エロトラップダンジョン化
したので
配信始めました。



第三話

ギルドのラボで、^{しょうご}祥吾は途端に特別対応冒険者となった。

ランク F の弱小冒険者だというのに、ギルドに多大なる富をもたらす、催淫材の原料を調達する『袋』にされてしまったのだ。

（俺の人権って、完全に無い感じだよなあ……
…）

やられるだけやられて、あとは、たっぷり精液をため込んでギルドへ戻って提出するという形だ。

しかし、ギルドから提示された金額というのは、もはや、普通のサラリーマンが一生かかって

も稼ぎ出すことができない金額になっていた。

(これだけ在れば、就職なんか考えなくて良いし
……好き勝手遊んで暮らせば良い……)

祥吾の目下のところの趣味は、SNSゲームだが、好きなキャラを自引きするところまでいくらでも課金出来る。それだけではなくて、好きな物を好きなように買える。なんなら、マンションを購入することだって出来る……。

(というより……)

祥吾は帰宅してから、疲れのあまりごろんと横になった。

お金は、もちろん欲しい。

ダンジョンにあと何回か潜るだけで、巨万の富

を得ることができる。

けれど、それだけではなくて、ダンジョンに潜りたかった。

「あの……竜人さんのちんこ……めっちゃ、悦かった……♡」

今まで、アナルを遣われることなど想像もしていなかったが、とにかく、身体の震えが止まらず頭が真っ白になるほど絶え間ない絶頂感を味わうことが出来るとは思わなかった。

「あんな、スゴいの体験しちゃったら、絶対、ムリだよ。フツートのセックスに戻れないって………」

スライムのぷんにやりした感じも気持ちが良いか

ったし、竜人の人も、ペニスはデカくて、壊れる
ほどだったのに、それが気持ち良くてたまらな
かった。それに、しっぽも、抜く時に引っかか
って、その抵抗感が溜まらなく良かった。

「ああ……どうしようかな……」

とにかく、あと数回は行かなければならない…
……。

期待している事に気がついた祥吾は、「ギ、ギル
ドの意向だし！！」と訳のわからない言い訳をし
ていた。

翌日、また、配信を立ててダンジョンへ潜る

と、目の前には、粘液をしたたらせていて、うねうねとした触手が無数に生えていたというわけだった。

粘膜そのものの、濃厚なピンク色をしたそれを前にして、祥吾は、カメラに向かう。

「わー…………これっ、絶対、ヤバイヤツでしょっ！！　こ、こんなのに捕まったら……………」

祥吾の言葉に反応して、次々と、風船付きのメッセージが表示される。

風船には、金額が書かれている。この生放送を見ている視聴者からの投げ銭だ。

『もちろん、壁に向かうよね、ショウくん♥』

『大丈夫大丈夫♥』

『ショウくんの可愛い姿たーっぷり楽しませていただきます♥』

「えーっ………みんな、無責任だよ〜っ」

もちろん、あの触手壁に入りたくてここに来ているわけだが………、こうしてちょっと嫌がった方が、たくさん投げ銭をしてもらえるのだ。

『ショウくんの可愛い姿、今日も見学します♥』

『このダンジョン、隅から隅まで攻略してね♥』

高額投げ銭が飛び交っているのを確認して

「わ、わかりましたっ、じゃあ、行きますね。

あ、その前に、今のステータスですっ！！」と祥

吾はステータスを表示した。

冒険者になるとステータスの確認ができる。

そしてさらに配信者になると、皆にステータス
を見せることができる。

祥吾 冒険者ランク F

レベル 4 H P : 3 6 0 M P : 4 5 感度 :

1 0 状態 : 正常

『あ、前回の配信で、レベル上がったんだね♥』

『前回レベル1からのスタートでレベル4ってことは・・・鬼イキ59回か♥　たくさんイッたねえ♥』

『今日もレベルアップ目指してね、ショウくん♥』

「えーっ…………レベルアップするのに、鬼イキ30回くらい必要じゃないですかっ！　今回は、覚悟してきたから、そんなにイきませんよっ！！」

『ザコイキして敗北してね♥』

『レベル3つくらい上がっちゃえ♥』

勝手なコメントとたくさんの投げ銭に歓喜しつつ、目の前の触手壁を見やった。ごくり、と生唾を飲み込む。

（ああああ♥ 早くあの触手に犯されたいっ♥ もう、身体の奥、欲しくてうずいちゃってる♥）

本音は隠しつつ、チラッと壁を見やる。

「じゃあ、行ってみますね？」

『おー、行け行け♥』

『今日も可愛い姿、堪能させてもらいます♥』

ちりーーん♥ と投げ銭の音が響くのを確認

して、祥吾は壁へ近付いた。

「あ、っうねうねしてるだけで、何もしてこなそう。良かったぁ……………って、あああちょっと！！！」

触手が伸びてきて脚と手を捕らえる。

『待ってました♡』

『頑張ってきてね～♡』

『しっかり見てるよ～♡』

投げ銭の音を聞きつつ、触手が服の中へ入ってくるのを感じた。壁の奥側へ運ばれつつ、あちこちに触手が絡みついてくる。手首。首。足首。

腰。身動きが出来なくなるところへ、ぬるぬるの触手がさらに侵入を始める。

乳首に絡みつき、脚を大きく開かされて、アナルの入り口をちゅるちゅるとなで始めた。

「あっっっっ……っえっ……っちょっ……お尻とか……ああっん♥」

触手が容赦なく、アナルの中へ入ってくる。

「あんっ……♥ ナカあっ♥ ……っっっ♥」

『おー……その触手、催淫効果のある粘液だっ
て』

『どうせなら、挿入箇所が見たいなあ』

その声に応じて、カメラが、アナルがよく見える位置に向かう。

カメラに写った自分の姿を見て、祥吾は、恥ずかしいのと背徳感に似た快感が同時に湧き上がっていた。

(見られちゃうう………♥)

大股開きにさせられたそこは、いつの間にか服も無くなっていて、細い触手が、うねりながらナカへ入っていくのが映し出されていた。

見られている、と思うと興奮して、ペニスが充血していく。

『興奮してるし………』

『もう、アナル出入り自由だな』

ダンジョンに入る前に、アナルはほぐして洗浄も済ませておいた。配信するとなると、その方がイイかなと思ったのだ。

「っんああ♥　っんんっっあっん♥　アナル、すごい…………♥　ナカから、前立腺、しちゃいやあっ♥」

身体がビクビクと震え始める。

催淫効果のある粘液のせいで、身体が燃えるように熱い。

早く、ナカをこすり上げてもらいたくて、腰が、へこへこ動く。

『早っ♥』

『腰動いちゃってるよ〜♥』

「んあっ♥ あああああ♥ っん♥ 奥っ♥ 奥う
〜っ♥ あゝんっっっっ♥」

細い触手が、もう一本、さらに一本と入ってきて、内部でうごめいている。

「あああああっ♥ バラバラに動いちゃ、ヤあっ
……♥」

うごめく触手の感触に翻弄されつつ、祥吾の身体が、びくっと震えた。

『おっ♡ 甘イキ♡』

『その調子でもっとイって、レベルアップしよう
ね♡』

ペニスにも触手が絡みつく。細い触手が、入り
口をくちくちと刺激し始めた。

「んっほっおおおおおおっ♡」

喉がのけぞる。頭がくらくらするのを感じつ
つ、祥吾は、なんとか意識を保とうとした。

気絶してしまうと、ダンジョンからはじかれて
しまう。

「んっあああっ♡ イクっ♡ イクイクイクイクう
ううっ♡」

『意識トばさないでよ〜』

『おっ、ショウくん、また、レベル上がったよ〜

♥』

『……………そろそろ、触手も満腹なんじゃないか

な♥』

配信を見ている人たちの観察は正しかった。ある程度満足すると、この壁は、冒険者を異物のように吐き出すのだ。

祥吾も吐き出されて、無様にダンジョンの床に転がる。

「はーっ♥ はーっ……………♥ このあいだと

……、ダンジョンのなか、ちがいます、よね
……」

この間は、最初に現れたのが、スライムだった。

今回は、触手壁。

「なんだろう、入るたびに、生成が違うダンジョン
みたいな感じ………？」

だとすると、実質、ダンジョンを踏破するのは
難しそうな気がするが………。

とりあえず、少し収まってきたので、祥吾はよろよろと立ち上がった。

「っふうっ………とりあえず、少し、進んでみ
すね。………このダンジョン、何があるかわから

なくて、ちょっと、困るんですけど………」

壁に手をつきながら、ゆっくりと歩いて行く。

脚がガクガクで、正直、歩くのも辛い。

「あっ………なんか、歩きにくい、ですね……
…」

『お尻、ぽっかり空いてるしねえ』

『また、なにか入れたくて溜まらないんじゃない
………？』

『ショウくん、変なスイッチとかあったら絶対に
押すんだよ！！』

下品なヤジは困りものだが、たった一人でダンジョンに潜っていることを思えば、すこしはさみしさも紛れるというものだ。

「へんなスイッチ？」

けれど、壁は、つるんとした石で組んであって、少しも突起などは見当たらない。

「んー……………、無いんじゃないかな。そういえば、この間の、スライムとか、竜人さんとかも、居ないですね」

気配もわからない。

『竜人に種付けして貰いたいでしょ♥』

『苗床になっちゃえ〜♥』

「あの人たちと、つがい？　みたいになったら、
どんな風になるのかわからないですけど……………。
卵、を産み付けられちゃう感じ？　なんですか
ね？」

産み付けられた卵を産卵する——メカニズムは
よくわからない。

けれど、身体之最奥に、卵を産み付けられる…
…………というのは、すこし、背徳的で、背筋がゾク
ゾクと震えた。

「なんか……………いいですよ。ちょっと、怖いで
すけど、体験はしてみたい気もするんですよ…
…………」

「っていうか、今まで、こういうダンジョンと繋がった世界の何の苗床になっちゃった人っているんですかね？ ファンタジーのエロとかだとよく見ますけど」

『なんか、インキュバスとかサキュバスの苗床になって廃人になっちゃった冒険者いなかった？』

『インキュバスの幻影魔法で、苗床になったヤツね』

『実際に、ほんものの卵とかを産み付けられるのは聞いたこと無い』

『でも、男が卵を産んで、男の体内に産み付けてどうすんだ？』

『つがい、って言ってたから、何か秘密とかやり方があんじゃね？』

視聴者たちも、首をひねっているようだった。

実際は、してみないとわからないということか、とは理解した。

「あれっ？ あの影に、なにかありますね」

ダンジョンの曲がり角、影になっている部分に、何かがある。何があるんだろうと思って近付いていく。

するとソコにあったのは、キノコの群生地だった。

「キノコ………ですね。食べられるのかなあ……

…」

とのんきにつぶやいていると、コメントから大声が聞こえてきた。

『ギルドの梅田ですっ！！ そのキノコ、持って帰ってくださいっ！！！！』

「えっ、えーっと、ラボの梅田さん。なんでリアタイで配信見てるんですか、仕事してくださいよ。今、勤務時間ですよ」

『何言ってるんですか。アナタの様子を見物するのは、立派な仕事です。そうでないと、こうして、採取の依頼も出来ませんからね！！』

「はぁ……………それはいいんですけど、これって、何かわかりますか？」

『んー……………おそらくは、我々が『マジック・マッシュルーム』と読んでいる、幻覚を見せるキノコの種類です。ですので、これは、採取してギルドに引き渡していただければ、高額で引き取れますよ』

『ショウくんお小遣いゲット！』

『でもちょっと、『マジック・マッシュルーム』とは違う気がするんだよなあ……………『マジック・マッシュルーム』って、フチが紫色なんだけど、これ、フチの色がピンクなんだよ』

『変異種じゃん？』

特殊な既知のキノコ、かもしれないなと思いつつ、祥吾は気をつけてキノコを採ることにした。

採取したアイテムは、ギルドから支給されている『四次元採取ポケット』に入れることができる。

よくあるファンタジー小説のスキル『アイテムボックス』や、国民的アニメのポケットのような働きをする。無限に、この中に採取したものを入れておくことができるというわけだ。

ナイフを取り出して、キノコの軸の根元から一つ一つ刈っていく。

「なんか、絵的に地味じゃないですか？」

「…………まあ、あちこち、服は無いんですけど…
……」

先ほどの触手壁に脱がされ、溶かされ、服の一部がなくなっている。

『今、休憩タイム』

『しゃがんでキノコ狩りっただけで、勃起できる』

『ショウくん、そんなキノコじゃないキノコが欲しいよねえ～』

視聴者の中には、キノコ狩りで妄想出来る上級

者もいるようなので、いささか安心した。

キノコを100個ほど取ったときだった。

「わっっ！！！」

急に、キノコの傘が反り返ったかと思うとばふ
っと音を立てて、胞子が飛び散る。

「……………なっ、なんだっ……………っ！？」

——ステータス異常【催淫】【媚薬】になりました。
た。

システムが丁寧に状態異常を宣告してくる。

「えっ、なんでっ！？」

けれど、身体が急に熱くなってきた。

「っえっ！！？ な、なに、このエロキノコ……
……っ」

目の前のキノコ——胞子を飛ばして傘が反り返ったキノコは、ペニスの形、そのものだった。

『すごっ勃起キノコじゃんw w w』

『初めて見た』

『ショウくん、その勃起キノコで、オナニーして
よ♡』

勃起キノコでオナニー??

冗談じゃない、と思ったが、たしかに、目の前
にあるキノコは、猛々しいペニスそのもので……

…。

(これ、奥で届いたら…………きもちよさそ……
…)

ふらふらと勃起キノコに近付いて、根元から刈り取ろうとして立ち上がる。

そのとき、ふらりと足元がグラついた。

「わあっ…………っ！！」

とっさに壁に手をつく。キノコがびっしりと生えていた壁なので、衝撃は無いだろう……………と
思っていたら、急に、腕を取られる感触があった。

「っえっ！？」

身体が、壁の中にめり込んでいる。正しくは、

上半身と、下半身が……………壁によって分断された形だ。膝をついて、尻を突き出した格好になっていた。

「っっっ！！？！」

『おーっ壁尻トラップ♥』

『きのこの山は、壁尻トラップの罠だったか〜』

祥吾からは、何が起きているかわからない。けれど、視聴者が、言うには、壁尻の形になっているということだ。

——デュアルモニタを起動します。

ご丁寧に、システムが、もう一台モニターを起動したようだった。つまり、尻側の様子が、祥吾の目の前にも展開されるということだ。

壁から生えた尻。

そして、先ほどの勃起キノコが、ずるずると近付いてきている。

「えっ、なにあれっ！？ 勃起キノコっ、動いてるっ……………」

『植物タイプのモンスターだな』

『初めて見たが…………』

『……………勃起キノコ、尻穴狙い定めてんじゃん』

「っっ！？　　っっっ……………、っイヤっ…………っ
っっやだぁっ…………っっっっ」

勃起キノコのひんやりした感触が、アナルに触れて、身体がビクッと跳ね上がった。

状態異常【催淫】【媚薬】のおかげで、感覚が鋭敏になっている。

勃起キノコが、ゆっくりと、アナルの入り口を撫でている。キノコは、冷たくて、ふにゃっとした感触だった。

「っんっ、っっうっ…………」

抵抗出来ないで尻を突き出したままのところ
へ、ゆっくりと、勃起キノコが侵入してくる。

「っひゃっ♥　っんっおっ、おっき…………っっっ
っ♥」

特に大きく張り出した傘部分が、アナルの入り
口を抜けるまでが大変で、ずぬっ♥　と入って
きたときには、息も絶え絶えだった。

「っあ♥　ああっ♥　…………なんかっ♥　キノコ、
表面、ぬるぬるっ♥　っんっあ♥」

キノコの表面には、なめこのようなぬめりがあ
って、その力でぬ”ぬ”ぬ”ぬ”っ♥　と中へ入
っていく。

「っん♥　っあっ♥　あああっ♥　奥っまでっっっ

♥ ナカ、ゴリゴリっ♥」

勃起キノコは、好き勝手に尻穴への出入りを初めている。ずぷっ♥ ぬぷっ♥ っと音がする。

「っあうっ♥ ナカっ………かゆいっ♥ っっっっ
っかゆくて、熱いよおっっっっ♥」

『この勃起キノコの粘液？ 媚薬みたいなかんじ
なんだな』

『抵抗出来ないで媚薬付け♥』

『これはもう、メス堕ち確定コースですね♥』

ちゃりん♥ ちゃりんっ♥

ものすごい勢いで、投げ銭されていく。

『おお、イイですね、ショウくん♥ ああ、その、勃起キノコの粘液も余さず持ち帰ってくださいよっ！？』

ギルドのラボ研究員、梅田も興奮気味にコメントしている。

「っ…………っっあっ♥ っん？ おっっ！？ っ
おっおっ おっ おっ おっ おっ っ♥ お、奥っ……………そっ
ちは…………っっっっ♥」

勃起キノコの長さなど、祥吾にはわからないが、勃起キノコが直腸を超えて結腸まで届いているのがわかる。

その上…………。

「お` お` お` お` お` お` お` お` お` っ〜っ
♥」

思わず声が出てしまった。

ナカで、勃起キノコが膨らんでいく…………。

『おおっ、すごい…………勃起キノコが、ぐんぐん
膨張してますよ！！！！ ああ、このキノコ、是
非、栽培したいですね…………』

「っっっお` お` っ♥ あ` ぐっ…………っ♥ んっほ

っ お お お お お っ ♥ ナカっ … … … ♥ ナカで、
膨れてっ … … … ♥ メス穴が、裂けちゃうううっ ♥
っ あっ ♥ 裂けちゃうけどっ ♥ 気持ちいいいい
っ ♥ っ あっ ♥ もっと ♥ もっとおっ ♥」

キノコの粘液のせいで、ナカはどんな些細な刺激にも反応するようになってしまった。

いまならば、ふっ ♥ と息を吹きかけられても、イくらろう。

「っ あゝ っ ♥ あゝ あゝ っ ツ ツ ♥ おゝ くっ ♥
あゝ ん っ っ っ っ ♥ ひぐ … … ♥ ふ、あ、あ … … ん
♥」

祥吾の声がひときわ甘くなる。

奥まで丹念に突かれて、どこを刺激されても、

感じてしまって、ほとんど、白目になりながらあ
えぎ続けるしかなかった。

勃起キノコに貫かれるたび、とろん、とペニス
から精液が漏れ出す。

壁に阻まれた下半身は、全く自由にならなく
て、好き勝手に『遣われている』という屈辱感に
目眩がする。

(あっ…………でも、屈辱的なのに…………敗北しち
ゃってるのに♡ もぉ♡ すごすぎるっ♡)

ビクッ、ビクッと身体が震える。そのたびに経
験値が加算されていくのがわかる。

——合計経験値が1050になりましたレベル

5 になりました。

固有スキル『ダンジョン配信』がレベル 3
になりました。

——合計経験値が 1 8 9 0 になりましたレベル
6 になりました。

——合計経験値が 3 4 0 1 になりましたレベル
7 になりました。

「ひぁあんッ♥ ひッ、んんッ……んう♥」

「あひッ……ん、あ、あ♥」

「ひぐ……♥ ふ、あ、あ……ん♥」

勃起キノコに犯されつづけて、イキっぱなしに

なっている。ほとんど、何が起きているかわからない状態だ。

『お～、ショウくん大丈夫か～』

『いき続けて体力減ってんのに、レベルアップで体力回復してんの草』

『固有スキルの『ダンジョン配信3』って、こっちでステータス見れるからたのし～』

いくたびに経験値が上がっていく。今は、ささやかな風が肌を撫でて行っただけでも、軽く達してしまう。

ステータスも『イキ癖』が追加されている。

(ああっ……もう、アナル………すごいことになってる………)

じゅぽじゅぽぬぷぬぷっ。アナルからは、勃起キノコから迸った粘液が粟立っている音が迸っている。

「あっ♥ んっ………っふっ………っんっんっ♥」

もう、逃げたいのに………どうしたら逃げられるかわからない。

「っあっ♥ ああっ♥ たすけ………っ♥」

気を失えばダンジョンから脱出出来るのはわかっているが、意識がトぶほどの刺激が来なかった。

つまり、イカされ続けているだけで、生かさず

殺さず、壁穴としてアナルを消費されているという
ことだ。

「っんふっ……………♥ ああああああっ
……………♥」

一瞬、意識がくらっとトんだとき、「おやおや、
俺の用意した罫は……………たのしんでもらえてい
るようだね♥ うんうん、やっぱり、君はとっても
可愛い♥」と、目の前から声が聞こえてきた。

「っあっ♥ っん……………あ、あんた……………
は？」

目の前に現れたのは、黒髪の男だった。けれど、
耳の先端がとんがっているし、衣装もファン
タジー世界の貴族が着るような、豪華な刺繍の入

った襟の立った服だ。それにマントも着けている。

「…………俺は、リ्यूイ。このダンジョンのマスターだ。…………魔力の相性が良いものをおびき寄せ、さまざまなトラップで精気を吸い取って——いじめられて可愛い顔をしている姿を見物するのが趣味でね」

くすくすと笑いながら、リ्यूイは近付いてくる。

「壁尻は、ダンジョン鉄板アイテムだが……………前側がお留守になるのが面白くないねえ」

にやっと笑いながら、リ्यूイは祥吾に近付いていく。つと、冷たくて長い指が、祥吾の頬を

撫でた。

「っひゃっっっっっ♥」

びくんっと身体が跳ねて、あっという間に達してしまふ。

「敏感な子は可愛くて好きだよ♥ ……君の為に、君が好きそうなトラップをたくさん作って置いたからね♥ ……まあまずは、この、寂しそうな乳首で遊んで上げようか…………」

リューイの指が、祥吾の乳首に伸びた。

「っひゃっんっ♥ ダメッっ♥ ダメッッッッッ♥」

「ダメ、ではないだろう？ ……こんなに感じて♥ ……乳首を引っ張られるのも、好きなよ

うだったな………♡」

ぎゅいっっ♡　　と乳首を抓られ引き延ばされる。

「ひゃっっっっ♡　　はぁん……♡　　ひぁぁんッ♡
ひッ、んんッ……んう♡」

「ああ思ったとおりだ。ココをいじめると、お前は、本当にかわいらしく鳴く♡」

抓って、こすられ、何度か祥吾の意識がトびかけるが、その都度、急に放されたり、一層強く抓られたりして、簡単には意識をトばすのを許してもらえなかった。

「っぁっ♡　　っっっっぁぁぁぁぁぁ……っぁ
……、や……、ん……っ……っ、あ……だ、め

… …」

「… ……あの竜人に、苗床にされる前に、俺が『印』をつけておくか」

パチン、とリューイの指が鳴ると、急に、壁が消えた。その瞬間、無造作に床に転がることになり、アナルに出入りしていた勃起キノコは、ずるんっ♡ と抜け出た。

「っあっっっ！！！」

そして、リューイが「お前も邪魔だ」とだけ宣言すると、勃起キノコが雲散霧消する。

「はー… ……っ♡ はー… ……っ♡」

床に転がっていた祥吾は、やっと解放されて、肩で荒い息をついている。

やられすぎていて、アナルがじんじんと痺れていた。

(あっ…………、助けて、くれたのかな…………
…？)

顔を上げると、リ्यूイが目の前で、うっすらと笑っていた。

第三話了。第四話に続く。

自宅がエロトラップダンジョン化したので配信始めました。

第三話

2 0 2 6 年 2 月 1 0 日

電 子 書 籍 版

V 1 . 0 0

著 者 P r o - Z E L O

小 説 七 瀬 京

イ ラ ス ト ・ キ ャ ラ ク タ ー デ ザ イ ン 藤 掛 ヒ メ ノ

発 行 者 P r o - Z E L O

レ ー ベ ル G r i s - G r i s 出 版

ホ ー ム ペ ー ジ <https://www.pro-zelo.com/>

T w i t t e r [@ ProZelo_epub](https://twitter.com/ProZelo_epub)

★本書をお読みになった感想、ご意見などありましたら、Twitterアカウントまでお寄せ下さい。

★本書の一部、あるいは全部を発行者の承認を受けずに無断で複写、複製することは禁じられています。

★本書によって生じたいかなる損害についても、著者ならびに発行者は責任を負いません。

Copyright Pro-ZELO;Mijako Nanase Himeno Fujikake